



裁縫上手だった母文子さんお手製のブラウスを着て講演する信友直子監督。両親が望んでいた沖縄への家族旅行を仕事を理由に行かなかったと明かし「後悔している」と目を潤ませた。文子さんは現在、脳梗塞で倒れ入院中という=11日、那覇市・県総合福祉センター

認知症介護 発想を転換

両親を記録した映画「ぼけますからー」 信友監督が県内講演

前向きに捉え信頼育む

横浜市在住のテレビディレクター信友直子さん(57)が監督を務めたドキュメンタリー映画「ぼけますから、よろしくお願ひします」の上映会が11日、那覇市の県総合福祉センターであった。広島県呉市で暮らす認知症の母文子さん(90)と、95歳で初めて家事に挑む父良則さん(99)の奮闘を1200日前にわざって記録した話題作だ。上映後に講演した信友監督は母が認知症になってから父娘の信頼関係が深まり、母が父に甘えるようになったことを「神様からの贈り物」と表現。発想の転換で新たな収穫があり、互いに笑顔になれると呼び掛けた。

11日の介護の日に合わせ県介護福祉士会が主催。介護・福祉関係者や民生委員、学生ら約300人が来場した。

かつては社交的で家事も完璧。一人娘が45歳で乳がんを患った時は、持ち前のユーモアセンスで励ました文子さんは映画では時の経過とともに記憶が衰え死んでいたと泣き叫んだり「ええじゃないね」とこぼしたりする姿を捉えていた。

信友監督は「ぼけたら何も分からなくなるわけではなく

く、本人が一番不安や絶望を感じている。母の気持ちを考えると、泣くことしかできなかつた」と振り返る。だが混乱状態になつてもしばらく寝ると、以前の穏やかな文字さに戻り「あんた、何で泣きよる?」と何事もなかつたよ

うに尋ねてきた。「母に揺さぶる信友直子さん(左)と良則さん(右)。添自宅で仲むつまじく寄り添う信友直子さん(左)と良則さん(右)。よろしくお願ひします」製作・配給委員会

ぶられて、落ち込むだけ損だなどと思った。認知症の人も一日中認知症ではない」と症状との向き合い方を見いだしていった。

一方、読書家で新聞を熟読するのが日課の良則さん。信友監督にとっては好きな空気のよくな存在」だったが、文子さんの介護で相談し合うようになり、「家長としての責任や、これまで身を粉にして支える姿がかっこいい」と見直した。

「わしが何とかせんといかん」という良則さんの美学で、「わしが何とかせんといかん」という介護サービスに頼らない老々介護を続けたが、サービスを受け入れプロの手を借りることで生活の中に笑顔が増えた。良則さんは「年寄りにどうての社会参加は阳县にどうてのことなんだな」としみじみ語つたといふ。

信友監督は「認知症にならないに越したことはないが、なったからといって悪いことばかりじゃない」と美感を認め。映画で家族の内美を明かした後は、地域の人たちの見守りの目に助けられたことも強調した。



講演後は、介護福祉指導教育推進機構(東京)の黒澤貞夫代表理事、県介護福祉士会の福井彰雄理事、沖縄タイムスの新垣綾子記者が加わり、住宅生活の親を支える家族をテーマに意見を交わした。